

ヒストリックカー・ミーティング in 伊勢志摩

▶2012.01-02▶伊勢・志摩/三重

02

地域文化に触れながら競技性も忘れない
フレンドリーなヒストリックカー・ラリー。

text & photo: Kazuhide Ueno(上野和秀)

現在日本では様々なヒストリックカー・ラリーが開催されるようになり、競技性の高いものからツーリング寄りまでいろいろとあり、さらにはワンディから4~5日に及ぶ本格的なものまで百花繚乱の感がある。そのなかでファンの絶大な支持を得ているヒストリックカー・ラリーがある。

それは、「五感を刺激する極上の車旅」を標榜するヒストリックカー・ミーティングだ。伊勢志摩を中心に開催されるイベントで、競技性とツアー性をみごとに両立させ、ルート上の地域文化の良さに触れながら、お気に入りのヒストリックカーで走るといふ、思い出に残るようなイベントに設えられているからだ。

そして、参加者を楽しませるためのプログラムに加え、細やかな心配りと手厚く用意された賞典が、参加者の人気を集める秘密のようだ。

また、ヒストリックカー・ミーティングでは、ヒストリックカー・ラリーで用いられるレギュラリティ・ラリーに出てみたい、というビギナーに向けて、ワンディで新しいモデルでも参加できる姉妹イベントの「名古屋クラシック・ラリー」も開かれていることも見逃さない。どちらもクルマで遊ぶという男の夢を、実現できる貴重な場を提供してくれているのである。

さて、今年のヒストリックカー・ミーティングは、伊勢神宮に程近い「伊勢かぐらリゾート 千の杜」を起点に南伊勢町、志摩地中海村を経てホテル近鉄アクアヴィッラまでの1日目と、翌日は阿児アリーナ、スペイン村駐車場でスペシャルステージが行われたあと伊雑宮でランチを楽しみ、伊勢志摩スカイラインで2本のロングステージに挑み、伊勢かぐらリゾート 千の杜に戻るといふルートが組まれた。

新たな試みとしては、3台1組でのチーム戦が設けられたことがある。ひとつの周回するPCを1台目が走り、戻ったところで計測ラインを2台目が同時に踏んでスタートし、同様に3台目についでフィッシュし、3台の合計タイムで競うというもの。初めてということでもエントリーも戸惑いながらトライしていたが、これから流行る競技種目かもしれない。

ヒストリックカー・ミーティングが参加者に支持されている要素のひとつが、徹底的に楽しませてくれるナイトパーティだ。回を重ねるごとに充実し、今回もイリュージョンからブラジル人ダンサーによるサンバまで用意され、次回を心配してしまうほどのレベルアップぶりだ。

そしてラリー終了後に行われる表彰式もこれまた人気の秘密だ。排気量やスーパーカーなどで分けられたクラスの1位から6位までが表彰され、そのほかに数多くの特別賞が設けられているので、手ぶらで帰るほうが難しいのだ。このほか恒例の伊勢海老を始めとする豪華賞品争奪大ジャンケン大会で盛り上がり、同じラリーを走った仲間との連帯感が生まれてくる。

自らのヒストリックカーを走らせて楽しみ、そこでしかいただけない土地の料理に舌鼓を打ち、パーティを存分に楽しみ、表彰式で盛り上がるイベントはそうあるものではない。

これからヒストリックカー・ラリーに参加を考えているのなら、ぜひこのヒストリックカー・ミーティングでデビューすることをお勧めしたい。週末の1泊2日という参加しやすいスケジュールに加え、ヒストリックカー・ラリーならではの楽しみ方を初心者にも分かり易く伝えてくれるとともに、温かく迎えてくれるからだ。これでもハードルが高い方にはワンディのラリーもあるので、まずはこちらで試してみるという手もある。●



賢浦漁港ではランチのあとに3連続公開PCが行われた。アタック中の沢田組のチンタリア202F。



今年は伊勢かぐらリゾート千の杜からスタート。スタート地点のすぐ先にPCが設けられた。



新たな試みとして、3台でチームを組んでリレー形式で行うタイムトライアルが行われ、盛り上がっていた。



スタート直後の2連続PCを行く館野組のディーノ246GTSピッツァリーニ。さながら最初の足慣らしといえた。



賢浦漁港では地元漁協提供の料理と新鮮な干物が振舞われ、参加者は土地の味を楽しんでいた。



ルートの各町は暖かく参加者を迎えてくれた。郷土芸能の実演や地元の特産品を提供していた。



志摩地中海村ではレスト・コントロールが設けられ、エントリーはコーヒーブレイク。



フィニッシュで完走賞のポインセチアを受け取る板上組のジャガーXK120。



このイベントは数多くの賞が設けられ、手厚くもてなしてくれることも人気の秘密。